

メソアメリカ南東部太平洋側のヒトの顔が彫られた 祭壇についての一考察

伊 藤 伸 幸

はじめに

ヒトの顔を表現することはどのような意味があるのだろうか。この小稿では、メソアメリカ南東部太平洋側でみられるヒトの顔を浮彫りした祭壇から、その意味を考察する。

チャルチュアパ遺跡タスマル地区で、鉢形土器を蓋とし円筒形土器を容器とした供物が出土した。この円筒形土器の側面にはヒトの顔が連続して表現されていた。この供物は、タスマル地区の建造物の増築の際に、捧げられたものとして考えられる（伊藤・柴田 2007）。一方、グアテマラ高地にあるタフムルコ遺跡では、側面に頭飾りをつけた人物の顔が9単位彫られた玉座が出土している（Dutton & Hobbs, 1943）。繰り返し表現されるヒトの顔は何を意味しているのだろうか。

ところで、メソアメリカではヒトの顔のみが彫られた石彫がある。そのなかには、祭壇もある。この小稿では、メソアメリカ南東部太平洋側で出土するヒトの顔が彫られた祭壇を考察する。また、この石彫を通して、メソアメリカにおける文化の交流についても検討する。

1. ヒトの顔が彫られた祭壇

ヒトの顔が彫られた祭壇は、メソアメリカ南東部太平洋側で20遺跡32基がみられる（図1、表1）。チアパス高地とグアテマラ高地に多く、太平洋側海岸部には少ない。タフムルコ遺跡には7基がみられ、最多となっている。この小稿では、メソアメリカでは一見するとヒトの顔とみえる顔が神を表している場合もあるため、神も含めた動物ではないヒトの顔を扱うこととする。顔の輪郭がわからない顔（図3.3）や文字と思われるカルトゥーシュに囲まれた顔（図6.1）については対象としない。

1) モロチャック遺跡

チアパス高地にあるサント・トン山の山頂に位置し、標高は1150mである。アクロポリスを中心に球戯場を含む10基以上の建造物がある。出土土器から古典期後期から後古典期に属するとされる。石彫は1基報告されている（Esponda, 1996）。

石彫：円形の祭壇石の側面にヒトの顔とサルが彫られている（ibid., fig. 5, 6）。

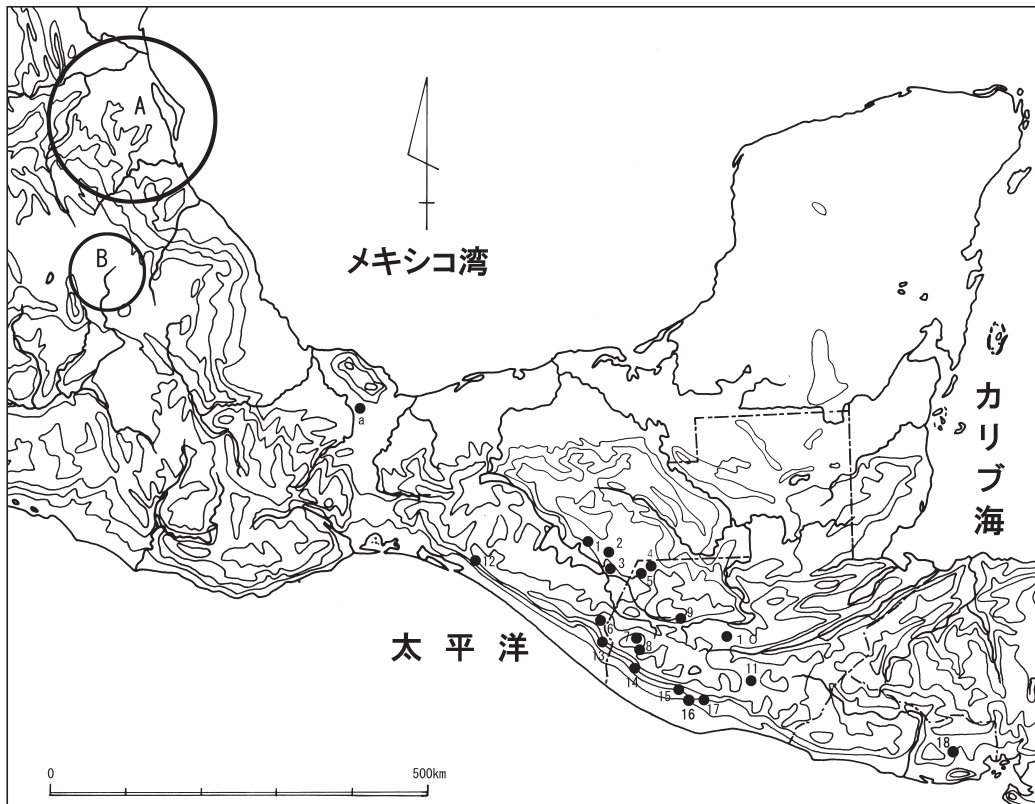


図1 ヒトの顔が彫られた石彫が出土した遺跡

メソアメリカ南東部太平洋側：1. モロチャック、2. オホ・デ・アグア、3. サンタ・イネス、4. ケン・サント、5. チャクラ、6. チマラパ、7. タフムルコ、8. バランカ・デ・ガルベス、9. サクレウ、10. ロス・セリートス・チホフ、11. カミナルフユ、12. イグレシア・ビエハ、13. イサパ、14. タカリク・アバフ、15. パロ・ゴルド、16. アグナ、17. コツマルワバ遺跡群、18. セロ・パバヤ

その他：a. ラグナ・デ・ロス・セロス、A. ワステカ地域、B. メシーカ地域

2) オホ・デ・アグア遺跡

グリハルバ川上流のやや平らになった部分に位置する。標高は約650mである。A, B, C建造物群に分かれており、最も建造物が集中するC建造物群は建造物10基以上が取り囲む部分を中心となっている。先古典期中期にA, B建造物群で居住が始められ、古典期後期にはC建造物群のアクロポリスが形成されたが、後古典期には放棄された。石彫は、2基報告されている。

石彫：円筒形をした祭壇の側面にヒトの顔が3単位彫られている（写真4.1）。報告者は、顔の横に浮彫りされているのは大きく口を開いたヘビと解釈している。古典期後期に形成されたC建造物群のアクロポリスの北にある球戯場の中央から出土した。時期は古典期後期である（Bryant, 2008）。

表1 ヒトの顔が彫られた祭壇

| | 遺跡 | 石彫 | 時期 | 祭壇 | | | | 顔 | | | 図・写真 |
|----|-------------|--------|------------------|-----------|-----------|-----------|----|-------|----|------|--------------------------------------|
| | | | | 高 (cm) | 幅 (cm) | 長 (cm) | 平面 | 単位 | 位置 | 目 | |
| 1 | モロチャック | — | 後古典期前期 | — | — | — | 円 | 1 | 側面 | 彫眼 | Esponda, 1996, fig. 5, 6 |
| 2 | オホ・デ・アグア | — | 古典期後期 | 30 | 44 | 42 | 円 | 3 | 側面 | 彫眼 | 写真4.1 |
| 3 | サンタ・イネス | — | — | 18 | 50 | 115 | 方 | 1 | 側面 | 彫眼 | 図2.4 |
| 4 | ケン・サント | — | 古典期後期～ | — | — | — | 円 | 1 | 上面 | 開目 | 図3.2 |
| 5 | | — | 後古典期前期 | — | — | — | — | 1 | 側面 | 開目 | 図2.3 |
| 6 | チャクラ | — | 古典期後期～ 後古典期前期 | 19 | 41 | 56 | 楕円 | 多 | 側面 | 開目 | Navarrete, 1978, fig.14h,15 |
| 7 | | — | | 12 | 56 | 60 | 円 | 1 | 上面 | 開目 | Navarrete,1979, fig. 17a |
| 8 | | — | | — | — | — | 円 | 1 | 上面 | 開目 | 図3.1 |
| 9 | チマラパ | — | 古典期後期～ 後古典期前期 | — | — | — | 方 | 2 | 側面 | 彫眼 | 図2.5 |
| 10 | タフムルコ | 1号石彫 | 後古典期 | 120 | 152 | 213 | 楕円 | 1 | 側面 | — | 写真8.1 |
| 11 | | 5号石彫 | | 32 | 75 | 105 | 楕円 | 1 | 側面 | 彫眼 | 図4.4、写真7.2 |
| 12 | | 10号記念物 | | 28 | 31 | 36 | — | 1 | 側面 | 開目 | Dutton & Hobbs, 1943, fig. 22d |
| 13 | | C石彫 | | 44 | 88 | 105 | 方 | 4 | 側面 | 彫眼 | 図4.1 |
| 14 | | F石彫 | | 45 | 88 | 102 | 方 | 9 | 側面 | 開目 | 図4.5、写真7.1 |
| 15 | | G石彫 | | 34 | 64 | 124 | 方 | 1 + a | 側面 | 彫眼 | 図4.2 |
| 16 | | — | | — | — | — | — | 1 | 側面 | 開目 | 図4.3 |
| 17 | バランカ・デ・ガルベス | 2号記念物 | 古典期 | 25 | 84 | 123 | 方 | 17 | 側面 | 開目 | 写真4.2 |
| 18 | サクレウ | — | 後古典期後期 | 36 | 35 | 14 | 円 | 1 | 上面 | 凹目 | Woodburry & Trik, 1953, fig. 278e |
| 19 | ロス・セリトス・チホフ | — | 古典期終末期 | 29 | 60 | 60 | 円 | 2 | 側面 | 彫眼 | 図2.6 |
| 20 | カミナルフユ | — | — | 80 | 75 | 15 | 円 | 1 | 上面 | 彫眼 | 写真2.2 |
| 21 | イグレシア・ビエハ | 1号祭壇 | — | 46 | 174 | 198 | 楕円 | 3 | 側面 | 開? | Ferdon, 1953, fig. 22a-d |
| 22 | イサバ | 31号記念物 | — | 20 | 34 | 41 | 方 | 2 | 側面 | 凹目 | 図2.2 |
| 23 | | 2号玉座 | — | 72 | 187 | 187 | 方 | 1 | 側面 | — | 写真6.1 |
| 24 | | 3号玉座 | — | 34 | 52 | 27 | 方 | 1 | 側面 | 彫眼 | 図2.1、写真6.2 |
| 25 | タカリク・アバフ | 28号祭壇 | 古典期後期 | 51 | 208 | 204 | 方 | 1 | 側面 | 眼窩 | 写真3.2 |
| 26 | パロ・ゴルド | 9号記念物 | — | 97 | 103 | 22 | 円 | 1 | 上面 | 眼窩 | 図5.1、写真1.1 |
| 27 | アグナ | 1号記念物 | — | 50 | 50 | 11 | 円 | 1 | 上面 | — | 写真1.2 |
| 28 | エル・パウル | 15号記念物 | — | 36 | 161 | 39 | 方 | 1 | 側面 | ゴーグル | 図6.2、写真5.1 |
| 29 | | 17号記念物 | — | — | 25 | 25 | 円 | 1 | 上面 | 眼窩 | Thompson, 1948, fig. 9a |
| 30 | | ビルバオ | — | 25 | 59 | 59 | 円 | 1 | 側面 | 眼窩 | 図5.3、写真3.1 |
| 31 | | ゴロン | — | 80 | 75 | 16 | 楕円 | 1 | 上面 | 眼窩 | 図5.2、写真2.1 |
| 32 | セロ・パバヤ | — | — | 24 | 58 | 25 | 方 | 4 | 側面 | 凹目 | 写真5.2 |

3) サンタ・イネス遺跡

チアパス高地のロサリオ谷に位置し、標高は約750mである。ピラミッド基壇2基と球戯場1基の他に、70基以上の小建造物がある。石彫1基が報告されている。時期は不明である。

石彫：平たい石に、ジャガーの口を持ち、豊頬のヒトの顔が彫られている（図2.4）。球戯場下の地表面にあった（De Montmollin, 1989）。

4) ケン・サント遺跡

グアテマラ高地にあり、標高は約1200mである。建造物が数十基ある。古典期後期から後古典期とされる。石彫数基が報告されている（Brady, et al., 2009；Navarrete, 1978；Seler, 1991；Villacorta C. y Villacorta, 1927）。

石彫：ヒトの顔が彫られている祭壇石は2基ある。側面に顔が彫られている祭壇（図2.3）、上部に丸い顔が彫られた“太陽の家”とされる円形祭壇（図3.2）が発見された。出土状況等は不明である。

5) チャクラ遺跡

グアテマラ高地のラカントウン川流域にある。標高1400mである。建造物が数基ある。古典期後期から後古典期とされる。50基以上の石彫が報告されている（Navarrete, 1978, 1979；Villacorta C. y Villacorta, 1927）。

石彫：ヒトの顔が彫られた祭壇は3基出土している。側面に幾つかの顔が彫られている円形の祭壇（Navarrete, 1978, fig. 14h, 15）、上部に丸い顔が彫られた“太陽の石”とされる円形祭壇（ibid., fig. 17a）、同様に髭がある人物の顔を彫った円形祭壇（図3.1）が発見された。

6) チマラパ遺跡

チアパス高地の標高1260mのところの位置している。2.5m～7mの4基の建造物が広場を形成する。古典期後期から後古典期とされる。石彫は1基報告されている。

石彫：ヒトの顔が彫られた祭壇は1基出土している（図2.5）。平たい石の側面に顔が2単位彫られている（Navarrete, 1978）。

7) タフムルコ遺跡

標高約2000mのタフムルコ火山麓にある。数基の建造物があり、埋葬21基が出土した。石彫は20基以上がみつかった。後古典期とされる（Dutton & Hobbs, 1943；Tejada, 1947）。

1号石彫：中央広場より出土した。側面には壁龕が浅く彫られ、その周りには物語的な情景が浮彫りされている。ヒトの顔は壁龕の中に彫られている（写真8.1）。

5号石彫：中央広場より出土した。楕円形の平面形をしており、三脚がついている。ヒトの顔は側面に浮彫りされている（図4.4、写真7.2）。

10号石彫：中央広場より出土した。方形石彫の破片である。側面に、ヒトの顔が彫られている（Dutton & Hobbs, 1943, fig. 22d）。

C石彫：III号建造物の西前から出土した。直方体で側面に動物などの顔とともにヒトの顔も

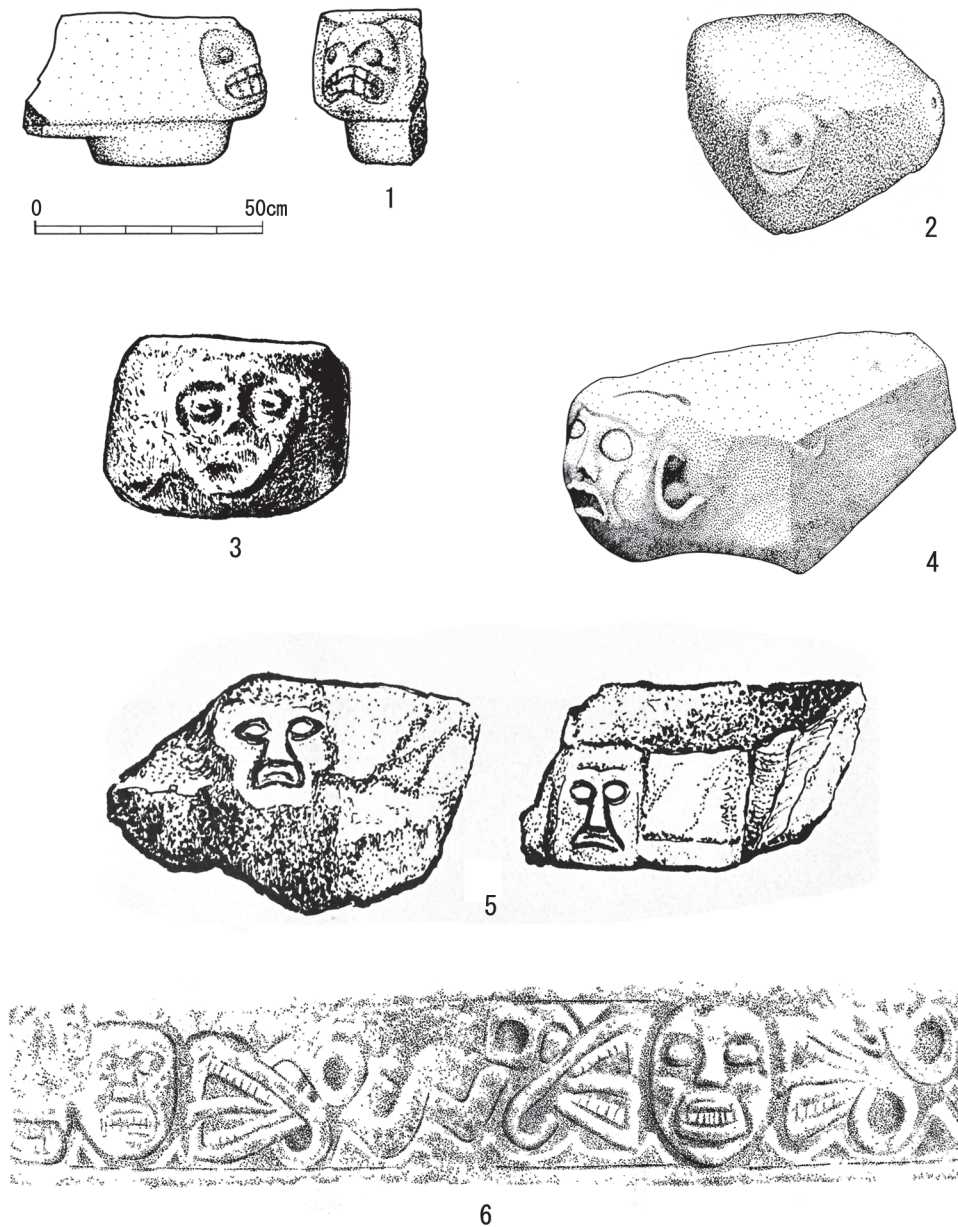


図2 ヒトの顔が彫られた祭壇

1. イサバ遺跡3号玉座、2. 同遺跡31号記念物、3. ケン・サント遺跡出土石彫、4. サンタ・イネス遺跡出土石彫、5. チマラバ遺跡出土石彫、6. ロス・セリートス・チホフ遺跡出土石彫
 (1 : 伊藤 2001 図2.2、2 : Norman, 1976, fig. 5.57、3 : Navarrete, 1979, fig. 19d、4 : De Montmollin, 1989, fig. 33、5 : Navarrete, 1978, lámina 10a、6 : Ichon, 1992, fig. 54より転載) 縮尺不詳(1を除く)



図3 ヒトの顔が彫られた円形祭壇

1. チャクラ遺跡出土石彫、2. ケン・サント遺跡出土石彫、3. シマロン遺跡出土石彫
(Navarrete, 1979, fig. 21a, b, 22b より転載) 縮尺不詳

彫られている(図4.1)。

F石彫：I, II, III号建造物に囲まれた広場より出土している。四脚付テーブル状台座形石彫である。側面に顔が彫られている(図4.5、写真7.1)。

G石彫：南東テラスより出土している。上部に十字形の溝を持つ板状の石彫である。ヒトの顔は側面に少なくとも1単位彫られている(図4.2)。

その他の石彫：タフルムコ遺跡では、以上の石彫の他に1基出土している。方形若しくは円形

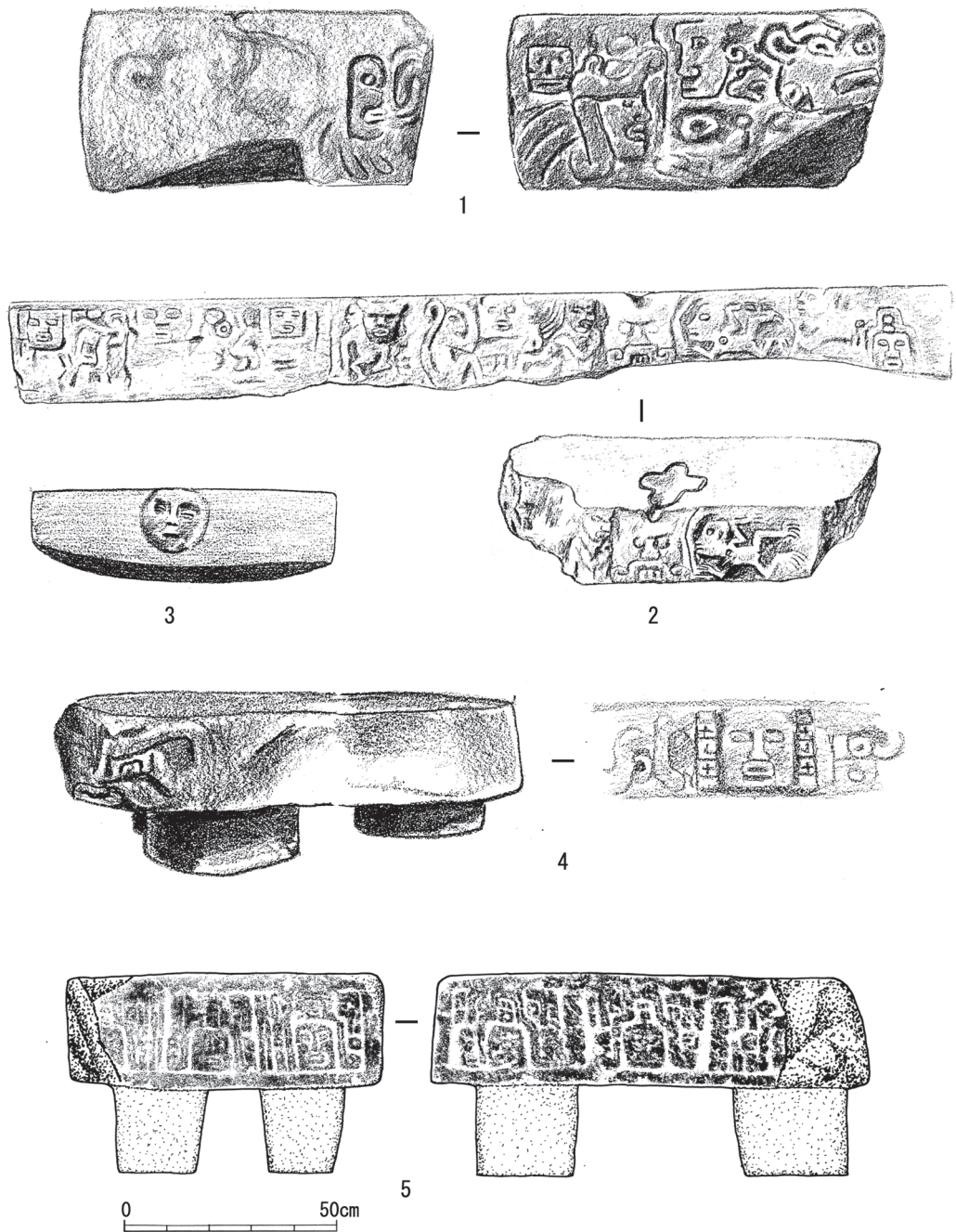


図4 タフムルコ遺跡出土石彫

1. C石彫、2. G石彫、3. その他の石彫、4. 5号石彫、5. F石彫
(1-4: Tejada, 1947、5: 伊藤 2001より転載) 縮尺不詳(5を除く)

の石の側面にヒトの顔が彫られている。出土状況等は不明である（図4.3）。

8) バランカ・デ・ガルベス遺跡

タフムルコ火山の南斜面にあり、標高約2040mである。建造物3基がある。石彫は5基報告されている。古典期前期～古典期後期とされる。

2号記念物：主となる建造物の正面に1号記念物とともに置かれていた（写真4.2）。方形の祭壇で、少なくとも17単位のヒトの顔が側面に彫られている（Piedrasanta y Morales, 2007）。

9) サクレウ遺跡

グアテマラ高地にあり、クチュマタネス山地に近いウェウェッテナンゴ谷に位置する。標高は1900mである。また、遺跡は三方を崖に囲まれた半島のような張り出し部分に位置する。8つの広場の周りに40基を超す建造物が配置されている。古典期前期から後古典期までとされる。数基の石彫が報告されている（Woodbury and Trik, 1953）。

石彫：4号建造物中央基壇の壁材として使われていた。楕円形で上面中央にヒトの顔が彫られている。シナバフル期（後古典期後期）とされる（ibid., 1953, fig. 278e）。

10) ロス・セリトス・チホフ遺跡

グアテマラ高地の山間部のやや平らになったところに位置する。標高は約1200mである。建造物12基が取り囲む広場を中心とするロス・セリトス地区と小さな建造物が散らばっているチホフ地区からなる。石彫は、完形1基を含む7基が報告されている。時期は古典期後期から後古典期までである。

石彫：円形の祭壇の側面に2単位のヒトの顔が彫られている。顔と顔の間にへびも浮彫りされている（図2.6）。古典期後期とされる球戯場の中央部から出土した。この円形祭壇は球戯場が機能しなくなってから置かれたとされる。時期は古典期終末期である（Ichon, 1992）。

11) カミナルフユ遺跡

グアテマラ高地のグアテマラ盆地西側の緩やかに傾斜する部分に位置する。標高は約1500mである。200を超えるマウンドが確認された。石彫は、石碑28基、祭壇14基、記念物65基等が出土した。時期は先古典期前期から古典期後期までである。

石彫：楕円形に整形された石の上面中央に、人物若しくは神の顔を浮彫している。その周りは幾何学文を浮彫りしている（写真2.2）。所蔵館（ポボル・ブフ博物館）記録によると、カミナルフユ遺跡出土とされる。出土状況などは不明である。

12) イグレシア・ビエハ遺跡

シエラ・マドレ山脈の麓、標高600mに位置している。A-E建造物群に分かれている。時期は、フェルドンは先古典期後期とするが、金子は炭素14年代測定から古典期前期の可能性があるとしている。石彫は石碑10基、祭壇4基、記念物13基他が出土している（Kaneko, 2006；金子 2007；Ferdon, 1953）。

1号祭壇：C-3建造物の階段正面に位置している。南面に怪物の顔、それ以外の三面にはヒ

トの顔が浮彫りされている (Ferdon, 1953, pl. 22.a-d)。

13) イサバ遺跡

シエラ・マドレ山脈から太平洋に向かって緩やかに下ったところにあり、標高約250m に位置している。建造物150基以上がA-G建造物群に分かれ、整然と並んでいる。石碑89基、祭壇90基、玉座3基、記念物71基が出土した。多くは建造物や広場に関連しているが、イサバ川等の河川に沿った場所からも出土した。時期は先古典期前期から後古典期前期までである。また、石彫の大半は先古典期後期（ギジェン期：紀元前300-50年）とされる (Lowe, et al., 1982 ; Norman, 1976)。

31号記念物：130号建造物の階段基部から出土した。階段の一部となっていた。南東と南西角にヒトの顔が彫られている (図2.2)。

2号玉座：球戯場西端、125号建造物の東端に接して出土した。ヒト若しくは怪物の頭部が浮彫りされている (写真6.1)。

3号玉座：125号建造物の表土から出土した。テーブル部角に髑髏が浮彫りされている (図2.1、写真6.2)。報告者は、当初は髑髏なしの石彫であったと考えている。

14) タカリク・アバフ遺跡

標高600m 前後の北から南へ傾斜する太平洋側斜面に位置し、北建造物群、西建造物群、中央建造物群に分けられる。石碑68基、祭壇32基、記念物139基が報告されている。先古典期中期から後古典期までである (Orrego, 1990 ; Schieber de L. y M. Orrego, 2001)。

28号祭壇：10号建造物の前で、55号石碑とともに出土した。正面に髑髏、上面には足跡が彫られている (写真3.2)。古典期後期とされる。

15) パロ・ゴールド遺跡

太平洋側斜面の標高約230m のところに位置し、建造物は31基を数え、8群に分けられる。石彫は20基以上が出土している。時期は先古典期前期から後古典期前期までである (Termer, 1973)。

9号記念物：円盤状の石の1面に髑髏若しくはヒトの顔が浮彫りされている (図5.1、写真1.1)。出土状況は不明である。報告者はモチーフから後古典期前期としている。

16) アグナ遺跡

標高約100m の太平洋側斜面に位置し、数基の建造物が確認されている。石彫は7基が出土している (Eisen, 1888 ; Parsons, 1967, 1969)。

1号記念物：円盤状の石の1面にヒトの横顔が浮彫りされている (写真1.2)。出土状況は不明である。

17) コツマルワバ遺跡群

コツマルワバ遺跡群は太平洋岸に位置し、標高は400m 前後である。エル・カステイヨ、エル・バウル、ビルバオ遺跡他から成っている。100基以上の石彫が出土している。先古典期中



図5 髑髏が彫られた祭壇の拓影

1. パロ・ゴールド遺跡9号記念物、2. グロン遺跡1号記念物、3. ビルバオ遺跡79号記念物

期から後古典期とされる (Thompson, 1948 ; Parsons, 1967, 1969)。

1) エル・バウル遺跡

上に数基の建造物が乗っている大きな基壇が中心となっている (Thompson, 1948)。

15号記念物：6号建造物の階段の一部となって出土した。階段の一部となっていた可能性がある。直方体の石の一面に浮彫が施されている。中央にトラロック神の頭部があり、その両側に4を示す円が彫られている (図6.2、写真5.1)。チンチジャは石彫の主題から後古典期前期としている (Chinchilla, 2012)。

17号記念物：平面形が円形で、上面に横顔の髑髏と6を示す数字が彫られている。出土状況などについては不明である (Thompson, 1948)。

2) ビルバオ遺跡

テラス状になっている部分に数基の建造物が乗っている。

79号記念物：平面形が円形で、側面に髑髏が、上面にはシカの横顔が浮彫りされている (図5.3、写真3.1)。また、上面には数字の6が彫られている。C建造物群2号建造物から出土した (Chinchilla, 2012, Ichon, A. y J. Cassier, 1975)。

3) ゴロン遺跡

ビルバオ遺跡東約500mに位置する。石彫3基が出土している。

1号記念物：円盤状の石の1面に浮彫りされている (図5.2、写真2.1)。上部に髑髏、その下にジャガーと9が彫られている。チンチジャは「8の死」を意味するとしている (Chinchilla, 2012)。

18) セロ・パバヤ遺跡

標高400mの太平洋側斜面に位置している。石彫1基が出土している。時期は不明である。

石彫：直方体の石の1面にヒトの顔が6単位浮彫りされている。正位と逆さになったヒトの顔が交互に組み合されている (写真5.2)。国立博物館の記録カードによれば1970年に発掘が行われたとあるが、出土状況等は不明である。

2. メソアメリカ南東部太平洋側におけるヒトの顔が彫られた祭壇の特徴

メソアメリカ南東部太平洋側地方におけるヒトの顔が彫られた祭壇は20遺跡32基が確認された。また、時期が不明なものを除くと、古典期後期から後古典期の間に落ち着く。また、出土遺跡を比較すると、高地に多く低地に少ない。以下ではその特徴を、祭壇の平面形、彫られたヒトの顔の単位数・位置や、顔自体が持つ特徴から検討する。

祭壇の平面形をみると、形が不明な3基を除くと、12基が方形、12基が円形、5基が楕円形である。彫られたヒトの顔の数をみると、1単位の祭壇が圧倒的に多く、21基である。2単位は3基である。3単位以上の顔が彫られている祭壇は、7基ある。バランカ・デ・ガルベ

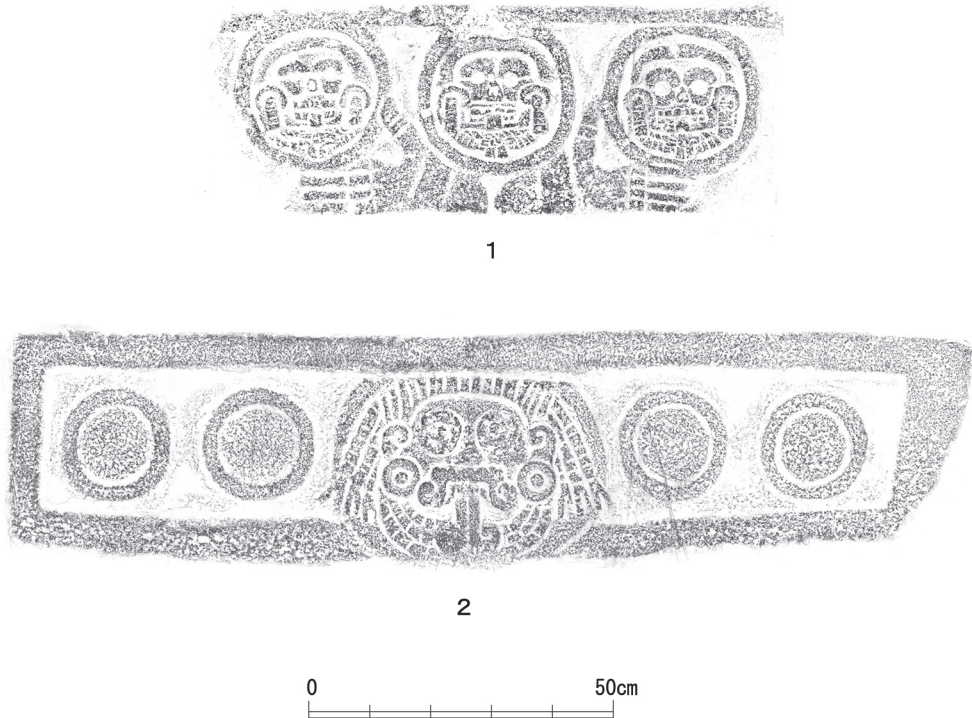


図6 髑髏と神が彫られた石彫の拓影

1. パロ・ゴルド遺跡10号記念物、2. エル・パウル遺跡15号記念物

ス遺跡の祭壇が最も多く、17単位以上の顔が彫られている。次に、タフムルコ遺跡F石彫が多く、9単位である。

顔が彫られる位置をみると、圧倒的に側面の場合が多く、23基である。上面の祭壇は8基である。この8基のうちでやや楕円形になるゴロン遺跡1号記念物を除くと、全てが平面形円形の祭壇となる。平面形が方形の祭壇には見られない。また、彫られるヒトの顔は、アグナ遺跡1号記念物とエル・パウル遺跡17号記念物を除くと、全てが正面から見た顔が彫られている。

顔が持つ特徴をみると、殆どがヒトの顔を表現しているが、髑髏や神もみられる。髑髏が彫られている祭壇はタカリク・アバフ遺跡からコツマルワパ遺跡に至る地域で、5基ある。一方、髑髏はこの地域では非常によく使われた図像である。祭壇側面に文字のように輪の中に彫られた髑髏(図6.1)や殆ど手加えされていない自然石に髑髏に彫られた石彫(写真8.2)もある。また、目に注目すると、目の部分の中心部を凹ませて目を開けているように表現しているのは、グアテマラ高地の4遺跡9基の石彫でみられる。単純に目の部分を凹ませて目を表現している石彫は、グアテマラ高地、チアパス海岸部、そして、エル・サルバドル東部に散在している。目の部分を表現したのみで開いているかが不明若しくは閉じている祭壇が10基ある。

イサバ遺跡3号玉座を除くと、すべてが高地の遺跡である。しかし、イサバ遺跡3号玉座は眼窩が明確に表現されており、全体的にみると髑髏である可能性が高い。以上を考慮すると、太平洋側の低地では死を表すために骸骨を、高地では死を表現するために閉じた目を選んでいる可能性が高い。

3. メソアメリカの他地域にみられる独立してヒトの顔のみを浮き彫りにした石彫

メソアメリカ南東部太平洋側を除くマヤ地方では、ヒトの顔が彫られた祭壇はなく、素面の祭壇が多い。浮彫りが施されている祭壇では、殆どが文字や人物である。一方、その他のメソアメリカでヒトの顔が彫られた祭壇をみると、メキシコ湾岸地方やメキシコ中央部で確認できる。しかし、オアハカ地方とメキシコ西部地方にはヒトの顔が彫られた祭壇はない(Williams, 1992)。

メキシコ湾岸では、オルメカ様式の石彫にヒトの顔の浮彫りがみられる。ラグナ・デ・ロス・セロス遺跡27号記念物は中央にドーナツ状の輪の中に顔が浮彫りされた円盤状の石彫である。目を閉じ、オルメカ様式の特徴的である口隅がやや下がった口をしている。彫られた面を下にして出土した。先古典期後期とされる(Medellin, 1960; Bove, 1978)。一方、ワステカ地域では数基の石彫がある。時期など出土状況については不明である。大きな方形の石板の片面の上部にヒトの顔を浮き彫りにしている石彫がある(De la Fuente y Gutierrez S., 1980)。メキシコ中央部では、後古典期のメシーカ様式の石製容器や方形祭壇の側面に髑髏が彫られている(Gutiérrez S., 1983)。

メソアメリカ全域をみると、ヒトの顔のみを彫る祭壇は少なく、時期に関しても散発的である。

4. メソアメリカにおける交流

メソアメリカ南東部太平洋側におけるヒトの顔が彫られた祭壇から、メソアメリカにおける文化の交流を検討する。最初に、この地域にみられるヒトの顔が彫られた祭壇の起源を考える。

メソアメリカ南東部太平洋側では、確実に時期がわかっている祭壇をみると、古典期後期が最も早い。しかし、イサバでは時期は不明であるが、石彫の多くは先古典期後期につくられた(Lowe, et al., 1982)とされるために、側面にヒトの顔が彫られる方形祭壇は先古典期にさかのぼる可能性はある。一方、上部にヒトの顔が彫られた円形祭壇はメソアメリカ南東部太平洋側地方以外にもみられる。メキシコ湾岸地方のラグナ・デ・ロス・セロス遺跡27号記念物は上面中央にヒトの顔が彫られた円形祭壇である。この祭壇は先古典期後期とされるために、メキシコ湾岸地方にその起源を求めることはできる。しかし、この後に続く祭壇がないために古

典期後期までの変遷がたどれない。一方、メシーカの暦を表す「太陽の石」には中央にヒトの顔が彫られている。この顔は、太陽神（トナティウ）とされ、顔を囲む輪の外側は上部に三角形の突起、右上下と左上下に四角の枠があり、その中に第5の太陽の前の太陽4個が表現されている（Matos M. y López L., 2012）。一方、ケン・サント遺跡の「太陽の家」とされる石彫は、顔の上の突起と左右上下に4単位ある幾何学文の表現がメシーカの「太陽の石」と似ている。また、側面に髑髏が彫られた祭壇は、メキシコ中央部のメシーカ地域にもみられるために、メソアメリカ南東部太平洋側の髑髏が側面に表現される祭壇はメキシコ中央部起源の可能性がある。しかし、タカリク・アバフ遺跡には古典期後期とされる28号祭壇があるために、この地方に起源がある可能性がある。一方、ヒトの顔が側面に浮彫りされる祭壇には、高浮彫りと浅浮彫りがある。高浮彫りのイサパ遺跡2号玉座やサンタ・イネス遺跡出土石彫は、メソアメリカの他の地域ではなく、メソアメリカ南東部太平洋側の特徴として捉えられる。一方、浅浮彫りの祭壇は、複数の顔があるものと一つだけのものに分けられる。メキシコ中央部には髑髏が多いが、メソアメリカ南東部太平洋側では髑髏以外の顔が多い。

エル・シマロン遺跡の祭壇（図3.3）をみると、顔その周りを幾何学文で囲んでいる。ケン・サント遺跡の「太陽の家」石彫と似ている。また、顔の輪郭は明確に表現されていないが、目鼻口は表現されている。その目鼻口の周りにみられる渦巻文はパロ・ゴールド遺跡9号記念物の渦巻文と似ている。パロ・ゴールド遺跡9号記念物は円形祭壇で上部中央に髑髏が、その周りに渦巻文が彫られている。このように見ていくと、グアテマラ高地と太平洋岸との交流があったことが考えられる。また、パロ・ゴールド遺跡近くにはメキシコ中央部の影響を受けたと考えられているコツマルワパ遺跡群があることを考慮すると、メキシコからの影響は先ずコツマルワパ遺跡群のある太平洋岸に到達し、その後、グアテマラ高地に達したとも考えられる。

メソアメリカ南東部太平洋側地方内での文化の交流をみる。ヘビとヒトの顔が浮彫りされている祭壇が、オホ・デ・アグア遺跡とロス・セリートス・チホフ遺跡で球戯場の中央で出土している。目をみると閉じているために、死を表現している可能性が高い。ヘビは死んだヒトの顔を飲み込もうとしているようである。出土位置が球戯場の中央であることを考慮すると、球技に関係が深い。球戯場は生と死を示す場であり、人身犠牲を決める場でもある（Scarborough and Wilcox, ed., 1991；Whittington, ed., 2001）。目を閉じて死を示しているのは死へ向かうことを意味しており、人身犠牲との関係も考えられる。従って、この祭壇若しくは球技のマーカーは死と関連が深く、人身犠牲とのかかわりを示しているのかもしれない。

顔と頭飾りの部分に注目すると、タフムルコ遺跡とセロ・パバヤ遺跡の表現が似ている。また、多くの顔を側面に表現していることも共通している。グアテマラ高地のタフムルコ遺跡F石彫の側面には凸形の顔が9単位彫られている。遠く離れたエル・サルバドルのセロ・パバヤ遺跡では若干の違いはあるが凸形の顔が彫られている。セロ・パバヤ遺跡では図像に対する正確さが欠けているが、上下互い違いに配置されて1側面に4単位の顔が彫られている。タフム

ルコ遺跡の凸形のヒトの顔は王権と密接な関係がある(伊藤 2004)。タフムルコ遺跡の王権とセロ・パバヤ遺跡の王権は何らかの関係があったことも考えられる。

おわりに

メソアメリカ南東部太平洋側では、古典期後期から後古典期に高地を中心にしてヒトの顔が彫られた祭壇がみられる。また、高地と低地の文化交流から各地においてそれぞれ独特の祭壇を作っていた。一方、他のメソアメリカ地域では殆どみられないため、この地域特有の石彫である可能性が高い。その起源は確定できないが、メキシコ中央部の可能性がある。しかし、ケン・サント遺跡の「太陽の家」石彫がメキシコ中央部のメシーカの暦を表す「太陽の石」に彫られた太陽神を表現しているとするならば、ヒトの顔を浮彫りした円形の祭壇は暦との関係が深いといえる。そして、ヒトの顔は太陽神を表現している可能性が高い。

ヒトの顔が複数彫られた祭壇は、非常に少ない。このうちでタフムルコ遺跡とセロ・パバヤ遺跡の共通点は、繰り返される凸形の顔である。タフムルコでは玉座とされる石彫に表現がみられることから、王権と関係している可能性が高い(伊藤 2001, 伊藤 2004)。彫られたヒトの顔は、支配者を意味していると考えられる。

以上のように、全てのヒトの顔を浮彫りした祭壇について解明できたとは言い難いが、一部の祭壇についてはその意味がある程度判明した。今後は、祭壇のみに限定しないで、石彫全体をみる必要もある。また、土器などにも繰り返し表現がみられる事例を採り分析してみる必要がある。

参考文献

- Bove, F.
1978 "Laguna de los Cerros, an Olmec Central Place." *Journal of New World Archaeology* 2(3): 1-56.
Brady, J., A. Cobb, L. Palit, D. Arburn, S. Graza, C. Christiansen, A. Perez, A. M. Scott y A. Delgado
2009 "Quen Santo Revisited: Updating Eduard Seler's 19th Century Cave Studies." In *Exploring Highland Maya Ritual Cave Use: Archaeology and Ethnography in Huehuetenango, Guatemala, Association for Mexican Cave Studies, Bulletin 20*, edited by J. E. Brady, Association for Mexican Cave Studies, Bulletin 20, pp. 9-25.
Bryant, D. D.
2008 *Excavations at Ojo de Agua, an Early Classic Maya Site in the Upper Grijalva Basin, Chiapas, Mexico. Papers of the New World Archaeological Foundation* 69, Brigham Young University, Provo.
Chinchilla M, O.
2012 *Cotzumalguapa: La Ciudad Arqueológica, El Baúl-Bilbao-El Castillo*. F & G Editores, Guatemala.
De la Fuente, B.
1973 *Escultura Monumental Olmeca. Cuadernos de Historia del Arte* 1, Instituto de Investigaciones

- Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- De la Fuente, B. y N. Gutierrez S.
- 1980 *Escultura Huasteca en Piedra. Cuadernos de Historia del Arte* 9, Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- De Montmollin, O.
- 1989 *Settlement Pattern Survey in the Rosario Valley, Chiapas, Mexico. Papers of the New World Archaeological Foundation* 57, Provo.
- Dutton, B. and H. R. Hobbs
- 1943 *Excavations at Tajumulco, Guatemala. Monographs of the School of American Research* 9, Santa Fe.
- Eisen, G.
- 1888 "On Some Ancient Sculptures from the Pacific of Guatemala." *Memoirs of the California Academy of Sciences* 2, pp. 9-20.
- Esponda J., V. M.
- 1996 "Santo Ton, una fortaleza de Postclásico Temprano." En *Quinto Foro de Arqueología de Chiapas*, coordinado por Dirección de Comunicación y Difusión Científica, pp. 233-246.
- Ferdon, E. N. Jr.
- 1953 *Tonala, Mexico: An Archaeological Survey. Monographs of American Research* 16, Santa Fe.
- Gutiérrez S., N.
- 1983 *Objetos Ceremoniales en Piedra de la Cultura Mexica. Estudios y Fuentes del Arte en México* 44, UNAM, México, D.F.
- Ichon, A.
- 1992 *Los Cerritos-Chijoj: La Transición Epiclásica en las Tierras Altas de Guatemala*. Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos, México, D.F.
- Ichon, A. y J. Cassier
- 1975 "Découvertes Récentes à Bilbao, Escuintla, Guatemala." *Société Siusse des Américanistes*.
- 伊藤伸幸
- 2001 「南メソアメリカ太平洋側斜面の四脚付テーブル状台座形石彫」『名古屋大学文学部研究論集』47(140): 7-26.
- 2004 「南メソアメリカ出土石彫に表現される四脚付テーブル状台座の考古学的分析—古代メソアメリカ王権の起源に関わる考古学的研究の一つとして—」『古代文化』56-1: 27-44.
- 伊藤伸幸・柴田潮音
- 2007 「チャルチュアバ遺跡タスマル地区 B1-1 建造物南側より出土した供物に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』53(158): 13-28.
- Kaneko, A.
- 2006 "Iglesia Vieja." En *Presencia Zoque*, editado por Aramoni C., Lee W., y L. Guillén, pp. 345-366.
- 金子明
- 2007 「メソアメリカ南部の太平洋岸トナラ地域の考古学調査」『メソアメリカに於ける古代都市の発展に関する研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書, pp. 113-129.
- Lowe, G. W., T. A. Lee, Jr., and E. Martinez E.
- 1982 *Izapa: An Introduction to the Ruins and Monuments. Papers of the New World Archaeological Foundation* 31, Brigham Young University, Provo.
- Matos M., E. y L. López L.
- 2012 *Escultura Monumental Mexica*. Fondo de Cultura Económica, México, D.F.
- Medellin Z., A.
- 1960 "Monolitos ineditos Olmecas." *La Palabra y el Hombre* 16: 75-97.
- Navarrete, C.
- 1978 *Un Reconocimiento de la Sierra Madre de Chiapas*. Universidad Nacional Autónoma de México,

- México, D.F.
- 1979 *Las Escultura de Chaculá. Serie Antropológica* 31, Instituto de Investigaciones Antropológica, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- Norman, V. G.
- 1976 *Izapa Sculpture 2: Text. Papers of the New World Archaeological Foundation* 30, Provo.
- Orrego C., M.
- 1990 *Investigaciones Arqueológicas en Abaj Takalik, El Asintal, Retalhuleu, Año 1988, Reporte No. 1.* Guatemala, C.A.
- Parsons, L. A.
- 1967 *Bilbao, Guatemala 1. Publications in Anthropology* 11, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
- 1969 *Bilbao, Guatemala 2. Publications in Anthropology* 12, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
- Piedrasanta, R. y M. A. Morales
- 2007 “Reconocimiento arqueológico en el sitio Barranca de Gálvez, San Marcos.” En *XX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2006*, editado por J. P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía, pp. 959-970.
- Scarborough, V. L. and D. R. Wilcox (ed.)
- 1991 *The Mesoamerican Ballgame*. University of Arizona Press, Tucson.
- Schieber de L., C. y M. Orrego C.
- 2001 *Los Senderos Milenarios de Abaj Takalik: Guía del Parque*. Ministerio de Cultura y Deportes, Guatemala.
- Seler, E.
- 1991 *Collected Works in Mesoamerican Linguistics and Archaeology: English Translations of German Papers from Gesammelte Abhandlungen Zur Amerikanischen*. Labyrinthos,
- Solís, F.
- 1981 *Escultura del Castillo de Teayo, Veracruz, México. Cuaderno de Historia del Arte* 16, Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- Tejeda, A.
- 1947 “Drawings of Tajumulco Sculptures.” *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology* 77, Division of Historical Research, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- Termer, F.
- 1973 *Palo Gordo : ein Beitrag zur Archäologie des pazifischen Guatemala. Monographien zur Völkerkunde/ hrsg. vom Hamburgisches Museum für Völkerkunde* 8, Kommissionsverlag K. Renner, München.
- Thompson, J. E.
- 1948 *An Archaeological Reconnaissance in the Cotzumalhuapa Region, Escuintla, Guatemala. Contributions to American Anthropology and History* 44, Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
- Villacorta C., J. A. y C. A. Villacorta
- 1927 *Arqueología Guatemalteca*. Guatemala, C.A.
- Williams, E.
- 1992 *Las Piedras Sagradas: Escultura Prehispánica del Occidente de México*. El Colegio de Michoacan, Zamora.
- Whittington, E. M. (ed.)
- 2001 *The Sport of Life and Death: The Mesoamerican Ballgame*. Thames & Hudson, London.
- Woodbury, R. B. and A. S. Trik
- 1953 *The Ruins of Zaculeu, Guatemala*. United Fruit Company, Richmond.

キーワード：古典期後期、後古典期、メソアメリカ南東部太平洋側、ヒトの顔が彫られた祭壇

Abstract

Altar esculpido con rostro antropomorfo en la Costa Sur de Mesoamérica

Nobuyuki ITO

Entre los periodos Clásico Tardío y Postclásico en la Costa Sur de Mesoamérica, se localizan varios altares que tienen un rostro o varias caras antropomorfas en la parte superior y lateral. Este tipo de altar se concentra en los altos de Chiapas y Guatemala, aunque existe la posibilidad que este tipo de altar sea originario del área Sureste de Mesoamérica, ya que en otras regiones son muy escasos altares de este tipo.

En Quen Santo hay un altar, llamado “Casa del Sol”, semejante a la parte central de la “Piedra del Sol” de la cultura Mexica. Resulta interesante que en la zona donde se desarrolló la cultura Cotzumalhuapa, se observan constantemente elementos culturales de la región de Centro de México, los cuales fueron introducidos a través de la zona de Cotzumalhuapa llegando a los altos de Guatemala y de Chiapas.

Inferimos que existió un intercambio entre el este de El Salvador y los Altos de Guatemala a través del poder político, ya que están representando el mismo rostro del personaje de alto rango. También en los altos de Chiapas y las Tierras Altas de Guatemala existió un intercambio de producción artística escultórica por medio de los rituales y costumbres efectuados para el juego de pelota.

Keywords: Clásico Tardío, Postclásico, Costa Sur, Mesoamérica, Altar esculpido con rostro antropomorfo



1



2

写真1 ヒトの顔が彫られた円形祭壇(1)

1. パロ・ゴールド遺跡9号記念物、2. アグナ遺跡1号記念物



1



2

写真2 ヒトの顔が彫られた円形祭壇(2)

1. グロン遺跡1号記念物、2. カミナルフユ遺跡出土石彫



1



2

写真3 ヒトの顔が彫られた円形祭壇(3)

1. ビルパオ遺跡79号記念物、2. タカリク・アパフ遺跡28号祭壇



1



2

写真4 ヒトの顔が彫られた円形祭壇(4)

1. オホ・デ・アグア遺跡出土祭壇、2. バランカ・デ・ガルベス遺跡2号記念物 (Piedrasanta y Morales, 2007, fig. 10より転載)



1



2

写真5 ヒトの顔が彫られた方形祭壇

1. エル・パウル遺跡15号記念物、2. セロ・パバヤ遺跡出土石彫



1



2

写真6 ヒトの顔が彫られた祭壇（イサバ遺跡出土）

1. 2号玉座、3号玉座

(24)



1



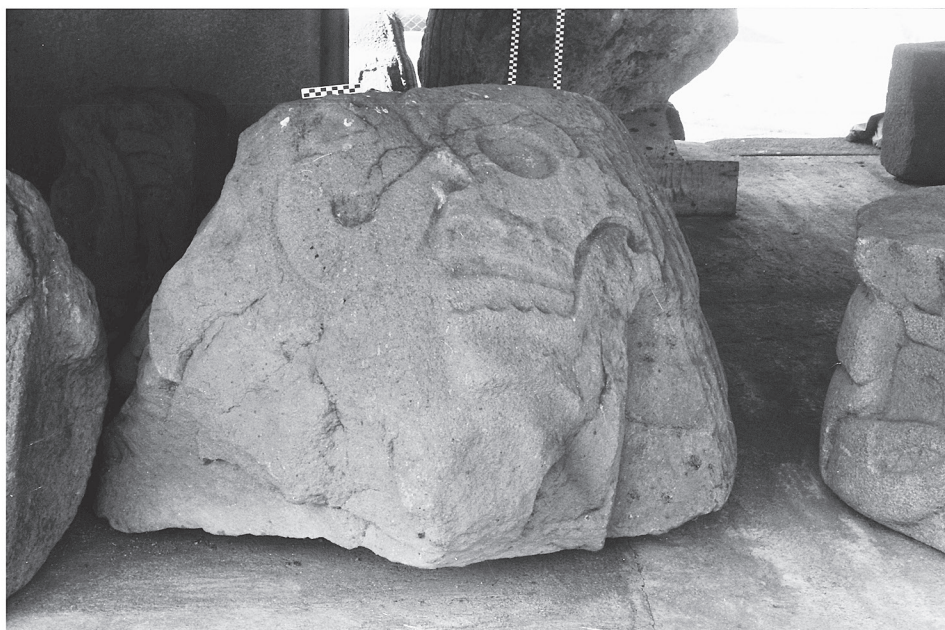
2

写真7 タフムルコ遺跡出土ヒトの顔が彫られた祭壇

1. F石彫、2. 5号石彫



1



2

写真8 ヒトの顔が彫られた石彫

1. タフムルコ遺跡1号石彫、2. エル・バウル遺跡10号記念物